

7 古代尺説と住居学（その1）

—住居学における古代尺要素と住宅史上の宅地割り等について—

広島大 加藤 泰
広島県庁建築課 追仲富久壮

古代尺とは人間身体に基づく世界的に最古の長さの単位で、エジプト、メソポタミアの $1 \text{ cubit} = 2 \text{ span} = 6 \text{ palm} = 24 \text{ finger}$ 、印度のウパニシヤットの身長 96 指、支那の 1 尋 8 尺、周尺曲約 6.5 寸等の度制で、結局本質を共通にすると見られるが、古代尺説とは日本の最古の度制も前述と共通のものであることを、先ず「日本塔婆高さ文献の古代尺について」で、その存在を言い、「古代尺高さ法による日本塔婆の分類について」でこの法の建築芸術型分類の基本となつて、伊東博士理論を訂正できることを、科学的に立説立証し、学界に大貢献したとの評（藤懸博士）を得、以て日本最古代尺もこれに他ならず、古来の建築割り、地割り（条坊、条里割りの一切）の基本も此に他ならないとの説である。本研究はその住居学との基本関係を主として第一で、その細部を第二で述べ、住居学上の従来説の誤謬の訂正もし度い。

第1には此様な空間量は住居学上基本要素となることを自分の生活芸術表現の弁証法否定関係としての類の見方より説明し Standardization, 日本住宅基本型に及ぶ。

第2に地割り問題として、古代尺文献として法隆寺寺院地方百丈古代尺説の根拠を述べ、藤原京古代尺復原の否定できないことを述べて、従来奈良京の宅地班給は藤原京の2分の1位との説が諸博士の著書により述べられているの誤謬を明らかにし、又その他古代尺関係の誤謬説の若干をも述べ住居学に資し度い。(昭和34年8月)